日本医史学雑誌　第56巻第1号（2010）　25–38

京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績

――第4報　医師および市民への講演活動――

廣谷　速人

京都市

受付：平成21年8月13日／受理：平成21年11月13日

要旨：松岡道治教授は，京都衛生検査所主催の医学講習会（明治34〔1901〕年発足），京都帝国大学医科大学主催の医学講習会（明治42〔1909〕年発足）の講師を務め，また各地の医学会で特別講演を行い，医師の卒後教育，とくに整形外科学，エックス線診断学の普及に貢献した．一方，一般市民を対象とした叡山講演会（明治40〔1907〕年夏開催）や京都帝国大学講演会（明治42〔1909〕年発足）へも参加した．松岡はこれらの広汎な講演活動によって，整形外科学の認知，普及に貢献しただけでなく，京都帝国大学が創立以来意図してきた大学拡張（university extension）の先駆けの役割を果たしたと言うべきである．

キーワード：松岡道治，京都衛生検査所，医学講習会，大学拡張，ユニバーシティ・エクステンション

第1章　はじめに

京都大学整形外科学教室初代教授松岡道治に関して，筆者はすでに教室の創立経過[1]，松岡の論文，学会発表[2]，著書[3] について発表してきた．松岡の学術講演についてはすでに第2報[2] で表示し，さらに出版された講演録についても第3報[3] ですでに述べた．

今回松岡が参加した医師への講習会，一般市民への講演会について改めてまとめて記述し，その背景と意義についても考察を加えることとする．

第2章　医師への講習会，講演会での活動

第1節　京都衛生検査所医学講習会

第1項　京都衛生検査所の発足

京都では，市内唯一の医事研鑽機関として京都医事会社[4] が明治10（1877）年に結成された．同26（1893）年に一旦休会したが，明治34（1901）年4月に再興されて京都医事会[5] と改称され，新たに京都衛生検査所[5,6,7,8,9] を京都市上京区（現・中京区）富小路二条下ル俵屋町に建築した[4,5,9]．この施設は医化学的・細菌学的検査を行う「実試所」の設置と医学講習会の開設をその目的としたものである[6]．

明治34（1901）年5月に挙行されたその開所式[10] で，同所監督[6] に就任した坪井次郎博士（京都帝国大学医科大学衛生学教授兼学長）は「検査材料の採取並に送附の方法に対する注意」[11] と題する講話を行っている．

第2項　医学講習会の開催

京都衛生検査所医学講習会の第1回[12] は，明治34（1901）年5月下旬土・水曜日午後7時から坪井博士（演題「黴菌学及衛生学」），荒木寅三郎博士（京都医科大学教授．同「医化学」），前田ドクトル[13]（「実地」午後1～4時）を講師として開催された．この講習会は「聴講生極めて多く，市内は勿論，近くは郡部，遠くは阪神より来るものあり」[12] と広く受け入れられ，前・後期二期に分けて行われた[14]．

この医学講習会は，翌年も両教授によって行われた[15]．その後明治38（1905）年末に京都衛生検査所が京都府医師会京都支部へ移管された[16]後も同様に行われ[17]，大正9（1920）年に京都隔離所（下京区〔現・東山区〕今熊野の旧日吉病院）に京都市衛生試験所が併設されて検査業務がそちらへ移管される[18]まで，約20年間続けられた[4,5,19]．

講習は原則として春秋2回，ほぼ2カ月間，毎週1回，夕刻に1時間ずつ行われ[4,5,17]，講師は京都医科大学の教授，助教授が担当した[4,5,19]．

第3項　松岡教授参加の医学講習会

松岡道治教授（演題「整形外科学」）は，明治40（1907）年度の医学講習会に今村新吉教授（同「精神病学」）とともに講師を務めた．同年3月2日付の京都衛生検査所告知書[20]には，「最新学科ニシテ世ニ出ズル日尚ホ浅ク其知識未ダ普及セズ居常往々適応症ヲ問ハレテ其答ニ窮スルガ如キ奇観アル整形外科学」と特記されている．

この時期は京都医科大学に整形外科学教室が創立（明治39〔1906〕年6月）[1]されて僅か9カ月を経たに過ぎず，松岡の身分もまた助教授であった（教授昇任は明治40〔1907〕年5月[1]）．したがってこの文言は，むしろ当然と言えよう．

この年度の講習会の開催回数，聴講者数は，精神病学（今村博士）15回，33人，整形外科学（松岡博士）24回，50人であった[4,21]．

翌明治41（1908）年度の講習会も今村・松岡両教授によって行われた．その開催回数と聴講者数は，精神病学（今村博士）13回，18人，整形外科学（松岡博士）15回，45人，後期から始まった法医学（岡本梁松博士）5回，45人であった[4,22]．

松岡の講演は盛況であったようで，終了に際しては「曩ニ斬新ナル整形外科学ガ喝采ノ裡ニ了」ったと記載されている[23]．しかし，松岡のその後この医学講習会へは参加してない[19]．

第4項　松岡教授参加の医学講習会の特異点

松岡らが参加した明治40（1907）年度の医学講習会は，明治34（1901）年の発足[12]以来8年目であったが，従来と異なる点がいくつかあった．

その第一は，『京都医事衛生誌』が「開講告知書」[20]以外に講習会に先立って異例の半ページ大の開講広告[24]を掲載し，さらに同年10月からの秋期開講時にも4分の1ページ大の特別広告[25]を掲載したことである．

このような広告，しかも2度の広告は講習会発足以後初めてのことであって，その後その例を見ない．これらは精神病学，整形外科学と言う，医術開業試験科目に含まれない，いわば新進の学問を会員である市中開業医家に周知させようとする主催者側の意図の現れであると考えられる．

第二は，整形外科学及精神病学の「講莚」が「実物標示等の都合」で京都医科大学附属医院構内の西大講堂[24,26,27]，東講堂[25,27,28]で開かれたことである．

当時の『医海時報』は，松岡らの講演会の直前に大学講義の公開に関する論説[29]を巻頭に発表し，「大学教授は官吏なり，大学の講堂，器具，薬品，瓦斯，電燈総て是れ官物なり」とし，「公共団体等の為に之を使用するも敢えて咎むべきにあらずと謂も，一私人として教授が此等を私用すること」は「大学官制の許さゞる所なり」と言う当局者の意向をも記述している．

天皇親政下の帝国大学に対するこのような当時の捉え方のなかで，いかに公務時間外の夕刻（午後5～6時および6～7時[20,24,25]）であっても，また京都衛生検査所からの「願済の上」[26]であっても，京都医科大学の講堂を会場として学外の医師を対象とする講演を教授が行うことは，極めて特異なことであったと言わざるをえない．

なお明治42（1908）年10月から行われた法医学（岡本博士），精神病学（今村博士）の講習会は再び京都衛生検査所で行われている[30]ので，附属医院講堂での講演は主に松岡の都合，とくにエックス線装置やエックス線写真の供覧のためであったものと考えられる[31]．

第三の異例は，それまで本講習会について報道していなかった上記『医海時報』が，松岡らの講演を「所謂自由講座の先鋒として今村博士（精神病学），松岡博士（外科学）が不取敢講習を開始した」と高く評価した[32]ことである．

すなわち『医海時報』の上記論説[29]によれば，当時の東京帝国大学医科大学には，時間をとくに設けて市内開業医に大学で臨床講義を行なう教授，自宅での外来診察の傍観生を率いて大学の講堂で講義を行い患者のデモンストラチオン（示説）をする教授，あるいは研究生から薬代瓦斯代として毎月一定の金額を徴収する教授などがいたことは「既に数年以来の事実」とのことであったと言う．そこで，これらの慣行を黙過することなく講義公開が可能なように官制の改正を断行せよと主張する一方，今や「一種の講義公開が見るに至れり，これ時勢要求の然らしむる所にあらずして何とぞ」と述べている．

すなわち松岡らの医学講習会は，京都衛生検査所医学講習会として斬新で異例づくめであっただけでなく，当時の帝国大学医科大学のあり方についても一石を投じた画期的なものであったと判断することができる．

第5項　京都衛生検査所講習会の意義

京都医科大学では，開学（明治32〔1899〕年9月）[1]のわずか4カ月後である明治33（1900）年1月，坪井教授が衛生学教室で黴菌学講習会[33]を開催した．この講習会は，折から神戸，ついで大阪へと拡大していたペストの流行が京都へ波及するのを予防するために，京都府衛生会[34]から依頼されて開催したものである．

これを契機として前述のように，約8カ月後の明治34（1901）年5月[12]から坪井（黴菌学）・荒木（生化学）両教授による京都衛生検査所医学講習会が発足し，次年度以降へ引き継がれたのである．両教授だけでなく，教室員や大学事務当局にとっても，前例のないその準備は大変であったものと想像できる．

降って明治42（1909）年4月，画期的な駆梅剤であるサルバルサン（いわゆる六〇六号）がドイツの学会で発表され[35]，同年10月には京都医学会でその治験例が早くも報告された[36]．

そこで京都衛生検査所は，京都医科大学皮膚科黴毒学講座の松浦有志太郎（うしたろう）教授に駆梅剤使用法の臨時講習会を要請した．松浦教授は急遽同年12月から翌明治43（1910）年1月に市中開業医を対象とした講習会[37,38]を学内東講堂で開催するとともに，ワッセルマン反応検査を教室で引き受けた[39]．

当時京都では，明治43（1910）年1月に“六〇六号（Sarvarsan．救生砒素）”が入荷すると報じられていて[40]，本剤使用に際しての知識，技術の教習，修得は，当時の京都の市中開業医にとって喫緊の課題であったわけであった．

このような時宜に叶った京都医科大学での臨時講習会は，毎年開催されていた各科の講習会とともに，市中開業医の研修に極めて有用であっただけでなく，大学と開業医との交流に大いに役立ったものと考えられ，『医海時報』の言う官立帝国大学の“自由講座”[32]，すなわち次述の“大学拡張（大学開放）”の先取りであったと言えよう．

第2節　京都医科大学講習会

第1項　京都医科大学医学講習会の発足

京都帝国大学医科大学は，大学の主目的たる学術の研究と学生の教育のほか，さらに新知識の普及を図るべく，新たに医学講習科を開設することを明治41（1908）年4月に決定し，定員は各科10～50名，講習料は1科目5円とした[41]．

当初はこのような講習科を「明年より他の諸分科大学にも及ぼすべし」と言うことであった[41]が，実はこの医学講習会ですら当初は予算の裏づけはなかったのである．

すなわち明治43（1910）年2月6日の第26回帝国議会衆議院予算委員第一分科会議録[42]によれば，「一般ニ医師ニ対シテ講習スルト云フコトハ国民ノ利益デアル，各国皆之ヲヤッテ居ル．而シテ此予算ヲ見ルト京都ノ医科大学ニハ講習科ヲ置イテヤッテ居ラレルヨウデアル，然ルニ尚東京或ハ福岡ト云フ医科大学ニモヤハリ此講習科ナルモノヲ置ク必要ガアルダラウト思フ，……（中略）……文部省ニハ果タシテ此点ニ就テドウ云フ御考ヲ持ッテオルカ」という青柳信五郎議員[43]の質問に対し，岡田良平政府委員（文部次官）[44]は「実ハ斯ク申ス私ガ京都ニ居ル時ニヤリ始メタノデアリマスガ，初ノ一年ハ此予算ニハ載シテ居リマセヌケレドモ，実際ニ実行イタシテ居リマス」とし，

「教師ガ全ク自分ノ好意的ノ仕事ト致シマシテ，殆ド報酬モ，受ケズセシテ」発足したが，「非常ニ其成績ガ佳良デアルト云ウ事ヲ認メタ」ので次年度から予算を付けることにしたと答弁している．

なお岡田次官はこの答弁の中で，東京では1，2の科目ではすでに講習を行なわれていて，「尚出来ベキダケハ科目ヲ殖シタイト云フ考ハ致シテ居リマス」と答弁しているが，実際は東京帝国大学医科大学では大正3（1914）年7月[45,46]，九州帝国大学医科大学では同年2月[47]に至って，ようやく医学講習科を発足させている．

なお『京都大学百年史』[48]は，京都医科大学の医学講習会と東京帝国大学医科大学の国家医学講習会[49]を並列的に比較しているが，両者は性格，内容ともに，まったく異質なものである．

第2項　京都医科大学講習会の背景

京都医科大学講習会が上述のように教授の自主的な決定によって設立，発足したことは特記すべきであるが，その背景には次のような諸事情があったと考えられる．

先ず，すでに明治34（1901）年から始まっていた京都衛生検査所主催の医学講習会が上述のように好評を博していたことから，受講者を京都医事会会員から全国の医師へ拡大しようと京都医科大学教授が考えることは，医学教育の面からも当然であると考えられる．

次に副収入に関する当時の事情が絡んでいると考えられる．当時の帝国大学医科大学教授の副収入に関しては，その頃の医学雑誌記事から窺うほかに手段はないが，以下のような記事が残されている．

第一に，上述[29]のように，公私の別を弁えない東京医科大学教授が数多く存在していたことがある．

第二に，明治42（1907）年の『医海時報』に東京医科大学各教授の推定副収入が連載されていて[50]，現職教授が私立病院長や医学雑誌発行人を兼ねることを予め総長に公認されていた教授もいたことも書かれている．

第三として，明治43（1908）年には東大某教授が「自宅における診察よりする収入」に税務署から課税され，「患者は凡て朋友知人にして情誼上已むを得ざるに出で決して一般営利的に之を為すにあらず又其謝礼の如きも一定せず且つ継続的のものに非ず」と，弁護士二人（内ひとりは法学博士，のち司法〔現・法務〕大臣になった）を代理として裁判で争ったが敗訴したと，報道されている[51]．

これらの信憑性は百年後の今日確かめ得ないが，当時の京大教授らはかつての恩師，先輩，同僚の行状として，より深い認識を持っていであろうと思われる．

しかもこのような公然の副収入は，明治40年代になって始めて生じたことではなく，自らが留学中に見聞した外国諸大学の教授と同様な行動（時間外自宅診療）をとっていたに過ぎず，世論もまたそれを是認していたと言える[52]．

京都ではすでに明治30（1897）年，『京都医事衛生誌』は（やがて新設されるであろう京都帝国大学医科大学の）教授の内職について憂慮の念を示していた[53]（京都医科大学の開設は明治32〔1899〕年[1]）．さらにたとえば，和辻春次教授が自宅で診察をすることを嫌がっていた話が，甥である和辻哲郎の自叙伝[54]に記述されているので，京都医科大学でも臨床系の教授の間では自宅診療が行われていたものと推定せざるを得ない．もっともそのことを示した記事は，松岡教授を含めて見出していない．

なお京都医科大学教授はすでに京都衛生検査所講習会で一定の収入を得ていたと考えられる[55]．

一方，明治34（1901）年に猪子止戈之助（しかのすけ）教授[55⑥]がドイツ留学へ出発する際[56,57]，「昨春来[58]京都医科大学内にて，市内開業医との営業上の争いを消滅させ，気兼しつゝ自宅開業をなすの必要もなき」ように，「公務時間外に於て各自専門の講座を開き，志望者を集めて臨床講義をなし，之より得たる報酬は各自教授者の所得となすべしとの議は唱えられ」，「猪子氏は傍々彼地に於ける是等の状況をも取り調ぶる筈」で「文部当局も賛成の意あり」と報じられている[59]．

もっとも猪子教授は2年の外遊予定を体調不良

のため1年で切り上げ帰国している[60]ので，所期の調査目的をどこまで達成できたかは不明である．

今日見ることのできる明治43（1910）年度京都帝国大学概算関係書類分[61]には，文部大臣からの医学講習会開催許可とともに，医学講習会の予算，決算が初めて計上され，講習科実施のための人件費も計上，支出されている．

第3項　松岡教授参加の医学講習会

（1）第1回講習会

京都医科大学医学講習会の具体的な内容と募集要項は，明治41（1908）年11月に発表された[62]．すなわち，講習は翌明治42（1909）年1月25日から4週間開催されることになり，講習料は1科目5円，定員は各科10～50人であった．松岡教授は「畸形矯正学及理学的療法」という演題のもとに第1回講習会へ参加した．

各科ごとの講師，演題，聴講者数を挙げると，衛生学（松下禎二教授「免疫学及血清療法」40人），耳鼻咽喉科学（和辻春次教授「一般医家ニ必要ナル耳鼻咽喉科学」50人），整形外科学50人，小児科学（三浦操一郎助教授「小児科学講義及患者供覧」50人），眼科学（市川清助教授「治療的方面ニ於ケル眼科学最近の進歩及眼病ト他ノ局所病及全身病」50人），皮梅科（於保乙彦助教授「皮膚病花柳病診断及治療ノ綱概」50人），病理学（中村八太郎助教授「病理学及病理解剖学」30人）であった[63]．なおこれらの聴講者数については，社会の要求と医師の希望を反映しているとする見方もあった[64]．

その時間表[63]によれば，講習は週6日，午前8時から午後4時まで昼食の1時間を除いて行われ，病理学と小児科学は週6日，他は週3回行われた（整形外科学は火・木・土曜日の午後2～3時）．

受講申込者は163名であった[65]が，受講証授与者は145名であって，全国各地から集まっている[66]（表1）．聴講生の選択科目数は図1に示す通りで，その平均は2.2科目であった[66]．

なお講習会では予定の講義だけでなく，受講者全員を対象とする特別講演も行われた[66]．すなわち開会式での和辻春次教授の講演（専門分科トハ何ゾヤ）のほか，期間中に荒木寅三郎医化学教授（糖尿及検尿法），松下禎二衛生学教授（細菌学一般），天谷千松生理学教授（脈波線ノ描画法），松浦有志太郎皮膚科黴毒学教授（蝋製模型〔種々ノ皮膚病〕供覧），藤浪鑑病理学教授（医学ニ於ケル遺伝ノ意義），市川清眼科学助教授（「トラホーム」ニ就テ）の講演が行われ，教授・助教授陣の講習会に対する意気込みを知ることができる．

講習会修了に際しては證書授与式と閉会式が行なわれ，その後受講者の発起によって平安神宮前にて講師，受講者一同の記念撮影を行い，その夜

表1　第1回京都医科大学講習会出身府別県受講者数（145名）[65]

受講者数	出身府県
19名	京都
13名	広島
9名	兵庫
7名	長野，島根，岡山
6名	愛知，大阪
5名	茨城，高知
4名	福島，三重，奈良，福岡，長崎，熊本
3名	富山，福井，大分
2名	岩手，宮城，秋田，東京，静岡，岐阜，滋賀，和歌山，山口，佐賀，鹿児島
1名	群馬，神奈川，新潟，石川，鳥取，愛媛

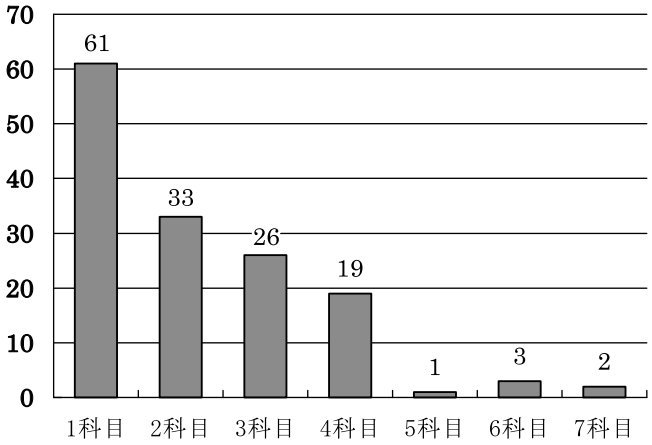

図1　第1回京都医科大學講習会聴講者（145名）選択科目数[66]

は祇園中村楼で懇親会を催した[66]．さらに講習期間中に，仙洞御所，東西本願寺，府立医学専門学校及療病院，京都帝大各分科大学を訪問するとともに，京都帝国大学課外特別講演[67]，京都医学会例会[68]に出席する便宜が与えられた[66]．

（2）第2回講習会

明治43（1910）年2月1日から開講された第2回医学講習会にも，松岡は「整形外科学及ソノ理学的療法一般」という演題で参加し[69]，火・木曜日の午後1～2時と隔週火・木曜日の午後2～3時に講義が行われた[70]．

各科の聴講者数は，眼科（浅山郁次郎教授「重要なる眼症の診断及治療」）50名，皮膚科（松浦有志太郎教授「皮膚病学花柳病学科外来患者臨床講義」）24名，衛生科（松下禎二教授「オプソニン療法及臨床細菌学」）35名，整形外科30名，病理科（速水猛教授「疾病の発生及治療」）22名，小児科（三浦操一郎助教授「小児科学講義及患者供覧」）50名で，精神病学（樋口辰助助教授「臨床精神病学」）は定員に満たずして中止された[71]．

講習生は，前回と同様に東西本願寺，仙洞御所，府立医学専門学校を訪問したほか，金曜特別講演[67,71]，京都医学会例会[72]を聴聞する機会が与えられた．閉会式の翌日は午前に各分科大学，午後に附属医院を参観して解散した[73]．

（3）第3回以降の医学講習会

第3回医学講習会（明治44〔1911〕年2月開催）の開講科目は皮膚病黴毒科，衛生学科，婦人科産科，耳鼻咽喉科，内科，精神病科で，整形外科学の講演は行われなかった[74]．

第4回医学講習会（明治45〔1912〕年2月開催）も整形外科学は講習科目に含まれなかった[75]が、松岡教授は科外講演「X放射線使用の心得及医学上の応用」を行った[76]．他の科外講師は，森島庫太（薬物学「加璽曳謨（カルシウム）の治効」），松浦有志太郎（皮膚科黴毒学「サルヴハルサンの使用法」），鈴木文太郎（解剖学「医学に於ける写真の応用」）の諸教授であった[76]．

以後松岡教授の参加記録は依願免官の大正3（1914）年1月までにない．なおこの医学講習会の記録は，昭和12（1937）年2月の開催予告[77]以降はない．

第4項　京都医科大学医学講習会の意義

医学講習会参加の実地医家にとって，交通・宿泊事情が今日では想像できないほど劣悪な明治時代末期に，医業を4週間も休止して京都に滞在することは，参加者に極めて大きな経済的負担を強いたと思われる．それに加えて講習費以外に「実習生ガ試験ノ材料トカ其他ノ費用ヲ支出スル」[42]こともあったようである．一方地元の患家先も医師の長期不在によって多大の不便，犠牲を強いら

れたことは必定であったものと考えられる．

しかし医師の生涯教育への意欲と熱意，患家の理解と寛容，さらには医学講習会講師の熱意，内容の魅力が，これらを克服，凌駕するものであったと判断せざるを得ない．

第3節　各地医学会・医師会での講演

松岡教授は，外科関係学会の総会ないし例会，あるいは上述の講習会以外にも，他科の学会や各地の医師会等で着任直後から講演を行っている．それらは既に第2報[2]に表示したところであるが，その後の調査結果を加えてここに一括して記載する．

1. 先天性股関節脱臼ニ就テ[78,79]．第21回日本小児科学会京都地方会来賓講演．明治39（1906）年12月15日，京都市．
2. 胃癌ノ発育（Wachstum）及ビ蔓延（Verbreitung）[80]．芸備医学会京都総会．明治40（1907）年2月，京都市．
3. 千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ[81]．京都医学会第4次総会．明治40（1907）年5月18日，京都市
4. 理学的療法[31①]．京都府医師会発会式．明治40（1907）年10月13日，京都市．
5. 先天性股関節脱臼手術及繃帯法供覧[82]．日本小児科学会第13回総会．明明治41〔1908〕年11月22日，京都市．
6. 骨及関節疾患に対するエツキス光線の価値[83]．濃飛医学会．明治43〔1910〕5月15日，岐阜市．
7. 松岡道治．小児外科ニ就テ[85]．明治43（1910）年，大阪市．
8. 「オルトペヂー」に就て[84]．第17回九州沖縄医学会総会．明治44（1911）年3月19日，鹿児島市．

第3章　一般市民への講演

第1節　叡山講演会

明治40（1907）年8月，すなわち教授就任（同年5月）直後に，松岡教授は夏季叡山大講演会の講師として招かれ，4題の講演を行っていることは，第3報[3]で述べたところである．

第2節　京都帝国大学講演会

京都帝国大学は，明治40（1907）年4月に創立10周年祝賀講演会を催して以来毎年4月1日の大学祝日に一般市民を対象に通俗講演会を行ない[48]，さらに明治2（1909）年からは開業医を対象とする上記医科大学講習会を開催してきた[41]．それらの成果に鑑み「欧米のユニヴアーシチー，エキステンション（大学拡張）[86]の例に倣ひ，本邦にては殆んど嚆矢とも云うべき各分科大学聯合の大講演会を毎年夏季朝の涼しい間を利用して開会すること」を，明治43（1910）年5月に決定した．この大学拡張は「各種専門学科の智識を広く一般に普及拡充するを目的とする」[87]ものであって，地元新聞はその一面冒頭に記事[88]を掲載し，「知能の開発，高等知識の普及だけでなく高等なる学芸技術に対する鼓舞たらんことを望む」と述べている．

その第1回講演会は，明治43（1910）年8月8日の午前（7～8時から10時）に開催された．法科2名，医科2名，文科3名，理工科9名，計16名の各分科大学教授，助教授が各6～24時間講演し，理工科大学では実験も行われたようである[48,87,88,89]．また午後8～9時には「科外通俗講演」が幻灯（写し絵）を使って催された[87,88,89]．

この講演会には，医科大学からは講演に松岡教授（「現今に於ける医学の趨勢」）と天谷千松教授（「生理学大要」），科外講話に鈴木文太郎教授（解剖学）が選ばれている[89,90]．

松岡の講演内容は，人間は常に如何にして長寿を保つやを論及するものなりとの前提で，ヘポクラス（ヒポクラテス）時代から医学の進化発達の梗概を述べて現今の医学会の趨勢に及び，将来の進歩に論及するものであったと当時の新聞が報道している[91]．

この第1回講演会は，聴講料が1科目2円，3科目以上3円であったが好評を博し，申込者は男性454名，女性18名の計472名に達した．うち男性400名，女性13名の計413名が受講証明書を受け取った．受講生を職業別に見ると，中学校，師範学校，高等女学校，各種私立学校の教員，小

学校訓導が多く（とくに女性はすべて教員）276名であって，その他は学生生徒，官公吏，実業家，農業，神官，僧侶などであった[48]．

松岡は，さらに大正元（1912）年夏の京都帝国大学講演会にも演者となり，演題は「放射線学」であった[91]が，その詳細は明らかでない．

なおこの講習会はその後昭和12年まで毎年続けられた[48]．

第4章　むすび

松岡道治教授在職中の講演活動を京都衛生検査所・京都医科大学の医学講演会や京都帝国大学講演会を中心に，その背景とともに記述し，それらの意義について考察を加えた．

松岡道治教授は学術論文[2]や著書[3]だけでなく，医師の卒後研修や市民の生涯教育に多大の時間と少なからざる労力を割き，初め「奇観アリ」と表現された整形外科学の普及に尽力したことは，松岡の大きな業績であった．

またこれらの京都医科大学教授の活動は，天皇親政下の帝国大学の枠を超えた大学開放の一翼を担っていて，木下廣次初代校長が大学創設時に意図した「京都の大学化」[93]，すなわち大学を市民に開放し，京都をして教育の中心たらしめんとする抱負を見事に具現したものであったと言える．

注記と引用文献

1）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績　第一報　京都大学整形外科教室の創立．日本医史学雑誌．2005; 51 (3): 385–406.

2）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績　二報　松岡道治の学術論文．日本医史学雑誌．2006; 52 (3): 361–393.

3）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業籍　第3報　著書について．日本医史学雑誌．2009; 55 (1): 43–55.

4）中辻丹治．第三　京都医事会社（第九篇　史外録）．京都市醫師會五十年史．京都市醫師會五十年史編纂部．1943．p. 800–805.

5）高橋實編．第一　京都衛生検査所（第五篇　事業）．文献4．p. 621–627.

6）京都医事会規則（雑報）．京都医事衛生誌．1901; 83: 19–20.

7）京都衛生検査所（雑報）．京都医事衛生誌．1901; 84: 17.

8）京都衛生検査所（雑報）．京都医事衛生誌．1901; 86: 23–24.

9）本会の来歴と衛生検査所創設の由来（会報　京都医事会録事）．京都医事衛生誌．1901; 87: 18–20.

10）京都衛生検査所（雑報会報　京都医事会録事）．文献9．22–23.

11）坪井次郎．黴菌学的可検材料の採収と運搬の方法一斑．文献9: 24–27．京都医事衛生誌．1901; 88: 22–23.

12）講習会（会報　京都医事会録事）．京都医事衛生誌．文献9: 18.

13）前田令太郎は万延元（1860）年の生まれ，明治24（1894）年にドイツの大学を卒業し，京都衛生検査所化学科部監督①を経て京都市内（四条通猪熊東入唐物屋町②，新町四条南入③で開業した．

①京都市衛生検査所（雑報）．京都医事衛生誌．文献12．p. 18．②日本杏林社編纂．京都市・下京区．日本杏林要覧　前編．東京：日本杏林社；1909．p. 173．③本田六郎編．京都．日本医籍録．第4版．東京：医事時論社；1928．p. 22.

14）京都医事会（明治三四年四月ヨリ同三五年四月ニ至ル）会務報告（会報　京都医事会録事）．京都医事衛生誌．1902; 99: 11–12.

衛生検査所の黴菌学及衛生学講習会は32回（前期14回，後期24回）開催され，出席者数は前期で61人，平均42.8人，後期で57人，同36.7人であった．医化学の方は39回（前期21回，後期18回）開催され，出席者数は前期で56人，平均出席者数38.8人，後期で62人，同29.9人であった．なお明治34年度の京都医事会の会員数は89名であった．

15）第二回講習会（会報　京都衛生検査所）．京都医事衛生誌．1901; 92: 20.

坪井博士は黴菌学並衛生学（特に実際的必要の問題に就て　学校衛生，工場衛生の類），荒木博士は医化学（前期の続き）の講演であった．

16）会告（会報　京都府医師会録事　京都府医師会京都支部録事）．京都医事衛生誌．1906; 142: 21.

17）京都衛生検査所講習会規程（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1906; 143: 15.

18）京都市衛生検査所（雑報）．京都医事衛生誌．1920; 317: 29.

19）廣谷速人．二〇世紀初頭の京都衛生検査所医学講習会について．医譚．2009；90（通巻107）: 5810（22）–5822（34）．

20）講習会　開講告知書（会報　京都衛生検査所）．京都医事衛生誌．1907; 156: 23.

21）第二　講習会ノ部（会報　京都府医師会京都市支部録事　明治四十年度事務報告）．京都医事衛生誌．1908; 167: 23.

22）第二　講習会ノ部（会報　京都衛生検査所　明治

四十一年度事務報告）．京都医事衛生誌．1909; 178: 25.
23）講習会（会報　京都衛生検査所）．京都医事衛生誌．1908; 175: 21–22.
24）開講広告．京都医事衛生誌．文献 20．p. 32.
25）特別広告　開講広告．京都医事衛生誌．1907; 162: 21.
26）講習会々場変更（雑報）．文献 20．p. 24.
27）京都大学広報委員会編．301．附属病院旧本館及び耳鼻咽喉科学教室（第 3 章　京都大学キャンパスの変遷　(5) 病院構内の変遷）．京都大学建築八十年のあゆみ．京都大学歴史的建造物調査報告（京大広報別刷）．京都大学広報委員会．1977．p. 64–65.
東西に走る春日通に南面して建てられた附属医院旧本館の西端から少し北に離れて「内科及小児科研究室及大講義室」（明治 37〔1904〕年建築），次いで本館東端の北側に張り出して「外科学教室　手術室及講義室」（明治 40〔1907〕年建設）が建築された．これらはそれぞれ“西大講堂”“東講堂”と呼ばれていたようである．
28）整形外科学と精神病学の講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1907; 166: 57.
29）大学に於ける講義の公開．医海時報．1907; 662: 307.
30）講習会（会報　京都衛生検査所）．京都医事衛生誌．1908; 175: 21–22.
なお岡本梁松教授は法医学の講習終了後，五十有余名を大学法医学教室で標本，写真，図画を懇篤に説示している①．
①法医学講習終了（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 183: 29.
31）松岡はその講演に際して器械，標本，図表，エックス線写真などを多数提示すのが常であったようである①,②．
①松岡道治．理学的療法．（会報　京都府医師会総会録事．京都府医師会会発会式大会順序〔明治 40［1907］年 10 月 13 日，京都市〕）．京都医事衛生誌．1907; 163: 16（電気療法の一節を講義し，幾多の器械，標本，図表を示したと記されている）．②学会見聞録．医海時報．1910; 825: 613–615.
32）京都医学講習所．医海時報．1907; 668: 409.
33）黴菌学講習会．京都医事衛生誌．1900; 70: 18–19.
明治 33（1900）年 1 月 22 日から 1 週間衛生学教室で隔日 2 時間ずつ行い，「講習ヲ経タルモノ無慮九拾又余名」と記されている①．
①京都府衛生会へ謝状．京都医事衛生誌．1900; 73: 19.
34）京都府衛生会の発会式．京都医事衛生誌．1899; 69: 18.
明治 16（1883）年に創設された大日本私立衛生会京都支部は，明 32（1899）年 11 月に発展的に独立して，京都府衛生会が設立された．
35）Ehrlich．Allgemeine Chemotherapie．および Hata．Chemotherapie der Spilosen（Vereinsberichte. 27. Kongreß für Innere Medizin, Wiesbade Sitzung II（19 April, 1910）．Deutsche medicinische Wochenschrift. 1910; 36（17）: 822.
36）山本淳二．エールリイヒ及び秦氏の梅毒新薬を注射したる一患者の供覧（京都医学会第 64 例会〔明治 43［1910］年 10 月 15 日〕）．京都医学雑誌．1911; 8（1）: 111（会報 1）．
37）梅毒新剤講習会（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1910; 201: 12.
明治 43（1910）年 12 月下旬から臨時講習会を 2 回開催した．なおこの講習会に先立ち，同年 11 月 27 日の京都府医師会総会において松浦教授は「エールリッヒ及秦氏梅毒新剤六百六号ノ効験ニ就テ」と題する講演を行っている①．
①京都府医師会総会順序．京都医事衛生誌．1910; 200: 12–13.
38）六〇六号使用法講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1911; 202: 50.
本記事によれば，京都医科大学皮膚科教室で旧臘 2 回，本年（明治 44〔1911〕年）もさらに 1 回講習会を実施する予定であった．なお京都府立医学専門学校でも梅毒血清検査および駆黴薬応用法の講義，実験（実習）の臨時講習会を本年 1 月に開催したが，聴講資格者を同校卒業生に限った．
39）梅毒反応検査料並六〇六号注射器具使用料等（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1911; 203: 42–43.
40）六〇六號の発売（雑報）．京都医事衛生誌．文献 37．p. 27.
41）京都帝国大学の医科講習科規程（雑報）．京都医事衛生誌．1908; 170: 28.
42）大学の医学講習科（雑報）①．京都医事衛生誌．1910（3 月）; 192: 45–46.
①第 26 回帝国議会衆議院予算委員第一分科（外務省，司法省及文部省所管）会議録（速記）第 7 回明治 43 年 2 月 6 日．帝国議会衆議院委員会議録　明治編　55．東京大学出版会．1989．p. 203.
43）青柳信五郎（明治 2〔1869〕年―大正 3〔1914〕年）①は，新潟県郡部選出の衆議院議員で立憲政友会所属であった．第一高等中学校卒．村会・郡会・県会議員を経て第 8 回（明治 36〔1903〕年），第 9 回（明治 37〔1904〕年），第 10 回（明治 41〔1908〕年）の衆議院議員総選挙に当選している．
①衆議院，参議院編．青柳信五郎．衆議院議員名鑑（議会制度七十年史．第 11 巻）．大蔵省印刷局．1962．p. 9.
44）岡田良平（元治 5〔1864〕年―昭和 9〔1934〕年）①,②は遠江国佐野郡倉真（くらみ）村（現・静岡県掛川市倉真）の出身で，明治 20（1887）年に帝国大学文科大学哲学科を卒業，第一高等中学校教諭を経て文部省へ入省，山口高等中学校校長などを経て，文部省総務長官（次官）から京都帝国大学総長となった．その在任期間は明治 40（1907）年 10 月から翌年 9 月まで②,③で，終わりの 2 カ月間は次官を再び兼務していた③ので，

医学講習会開設決定当事は確かに総長であった．しかし，この講習会経費が正式に大学予算に計上されたのは，明治43年度からである[4]．

岡田はその後文部大臣を3度勤めた[2]が，二宮尊徳（天明7〔1787〕年―安政3〔1856〕年）の報徳主義の熱烈な信奉者として有名であった[1,2,5]．

①千朶木仙史．京都大学総長　岡田良平氏．学界文壇時代之新人．東京：天地堂；1908．p. 58–67．②松浦鎮次郎編著兼出版．付録　岡田先生略歴．岡田良平先生小伝．p. 252–262．③京都大学百年史編集委員会編．（1）総長（第4編　一覧・統計　4主要人事一覧）．京都大学百年史．資料編3，京都大学教育研究振興財団；2001．p. 134．④明治四十三年度執行予算書．京都帝国大学大学文書館＞非現業法人文書＞事務本部＞財務＞執行予算書類．資料番号：01A07499．⑤並松信久．京都帝国大学と報徳主義―岡田総長退職事件をめぐって―．京都産業大学論集　人文科学系列．2005; 33: 46–73．

45）東大医科講習科開講式．医海時報．1914; 1045: 1171．

東京帝国大学医科大学における医学講習会については，すでに明治42（1909）年の『医海時報』[1]は，医科大学は大学公開の理念の下に京都医大のようにその実現を主張し，総長は反対している[2]と報道されたが，大正3（1914）年6月末に漸く発足した．

①東京医大の講習に就て（医海時報）．医海時報．1909; 789: 1089．②医科大学の開業医短期講習科（総長の反対）（雑報）．医海時報．1909; 788: 1062．

46）寺崎昌男．付設教育課程―そのさまざまなかたち―（プロムナード東京大学史〈15〉）．UP．1990; 213（19〔7〕）: 7–11．

47）折田悦郎．明治・大正期における大学講習会について―九州帝国大学講演会医学講習会の場合―．九州文化史研究所紀要．1991; 36: 355–384．

九州帝国大学講演会は大正2（1913）年6月に規則が制定され，同3（1914）年2月に発足した．その規則は，明治36（1903）年の創立から同44（1911）年まで官制上属していた京都帝国大学[1]の京都医科大学講習会のそれに酷似しているが，“医学講習会”とはなっていない．さらなる特徴は，期間が3日～2週間と短く，かつ結核，黴毒などのテーマごとの講義が行われたこと，聴講生によって講義録が編集，出版されて好評を博したことなどであるとされている．なおこの論文の記述は第10回（大正8〔1919〕年）までに留まっている．

①明治36（1903）年の創設当初は京都帝国大学福岡医科大学と呼ばれ，明治44（1911）年に九州帝国大学医科大学となった．

48）京都大学百年史編集委員会編．第1項　学内の整備（第1編　総説　第3章　京都帝国大学の整備　第2節　菊池大麓総長から久原躬弦総長へ）．京都大学百年史　総説編．京都大学後援会：1998．p. 197–201．

49）東京大学百年史編集委員会編．三　付設的教育課程とその機能（二）―国家医学講習科・理科大学簡易講習科・農科大学乙科―（第4編　東京帝国大学の整備　第3章　東京帝国大学と教育・学術・社会．第1節　学校制度の整備と東京帝国大学）．東京大学百年史　通史二．東京大学出版会．1985．p. 131–144．

国家医学講習科は，病理解剖学，衛生学，裁判医学（法医学），医制（法律）などの国家医学（Staatsarzneikunde, state medicine，国政医学，公医学，社会医学，公衆医学とも呼ばれ，従来の各人医学〔individual medicine〕に対立する学問であって，いずれも医術開業試験科目に含まれていない）を12週間教育する課程で，東京大学医科大学裁判医学（法医学）講座片山国嘉教授によって提唱され，明治22（1889）年に同大学に開設された．その後片山教授によって，衛生医，裁判医の専門二科を兼務する市区郡医[1]を全国に配置することが論じられたため，地方各市町村から選抜されて受講することは当時極めて名誉なことであった[2]．しかしまた，その受講証を「自家宣伝の一手段と為す者」もなしとはしなかったと言われた[45]．

①片山国嘉．市区郡医制度論．東京医学会雑誌．1889; 3（19）: 1082–1092．②石崎達．医科大学医学講習科記録（生徒資料も含む）．日本医史学雑誌．1993; 44: 317–350．

50）素町人生．教授の収入（一～十）（雑報）．医海時報．1909（1～3月）; 759: 55, 760: 136, 761: 175, 762: 205, 763: 232, 764: 262, 765: 293, 766: 330, 767: 362, 768: 390．

臨床系教授は自宅新築に際しては診察室を設計するのが普通であったと言われていて，大学教授の俸給はほぼ本俸1,200円，講座俸900円であったが，大学以外の副収入，とくに自宅診療による収入が3～4万円にも達すると推定される教授もいたようである．

ちなみに明治40（1907）年の京都帝国大学の給与は総長3,500～4,000円（本省次官より上），教授1,000～2,000円，助教授500～1,000円であり[1]，京都府知事は4,500円であった[2]．

①帝国大学高等官官等俸給令第三条第二項ヲ左ノ朱書ノ通改正．京都大学大学文書館＞個人資料＞木下広次関係資料＞書類＞京都大学関係．資料番号：木下-I-128．②京都府内務部庶務課編纂．其の1　勅任，奏任及判任（第232　府官吏〔明治43年12月31日〕）．京都府治概覧（第二十三回）．京都府；1910．p. 339–340．

51）大学教授の内職と所得税（雑報）．京都医事衛生誌．1910（2月）; 191: 25．

52）大学教授の自宅診療（Privatklinik）が少なくとも欧州の大学で認められていたことは，広く知られているところ[1]であって，『医海時報』は「社会の為め，人類の為め，寧ろ歓迎すべく，又た法律規則上にも少しも違背する所なきものと断定するを得る」と主

張[②]している．

①天児民和．住田正雄教授（1879–1946）．整形外科を育てた人達．九州大学整形外科学教室同窓会．1999．p. 420–423．②教授の自宅診察に就て（雑報）．医海時報．1909; 772: 528.

53）大学教授の自宅開業（雑報）．京都医事衛生誌．1897; 41: 21.

54）和辻哲郎．わたくしの生まれた家．自敍傳の試み．東京：中央公論社．1961．p. 100–102.

和辻哲郎（明治22〔1889〕年―昭和45〔1960〕年．倫理学者，哲学者）の父・瑞太郎（医師）の弟が和辻春次京都医科大学耳鼻咽喉科学教授であって，哲郎が学生時代に東京から叔父・春次宅（南禅寺門前の順正書院）を訪ねていたときの話である．

なお和辻教授の弟子である鳥居によれば，私立病院を経営して多くの収入を得ていた某大学教授が，奇特にも教室の創立何周年記念日に多額の寄付をしたと言う記事に対して，和辻は「陛下が吾々を大学教授に任じ賜うのは，金銭を大学に寄付させようとの御思召ではない筈，俺は彼を面罵してやる」と云いふらしていたと言う[①]．

①鳥居恵二．師の影を追うて（上）京大名誉教授和辻春次先生ご生誕百年に思う．日本医事新報．1964; 2116: 43–45.

55）前節の京都衛生検査所医学講習会での講師収入に関して，聴講料の収入と講師報酬の支出の記載がある明治40（1907）～同44（1911）年度決算報告[①,②,③,④,⑤]を見ると，講師報酬が聴講料収入を2倍以上概して上回っているものの，講師に対して応分の報酬が払われていたことは確かである．

京都医科大学猪子止戈之助外科学教授[⑥]は，明治42（1909）年4月から外科学講習会[⑦]を行った（21回，聴講者は55名．聴講料は会員1人50銭）が，講習終了後に京都衛生検査所へ70円寄付[⑧]している．これは猪子教授への講師報酬の全部ないし一部であったと考えられる．その理由は，第一に明治42年度の予算（歳出之部）の報酬欄には「講師金七拾五円（二十五日分）」と注記されているのにほぼ符合している[⑨]からである．第二に，聴講生の多くが京都府医学校校長時代の教え子であったことから，猪子教授が寄付を発意したと推定することができるからでもある．

①第二　明治四十年度（自明治四十年一月　至同年十二月）歳入出決算（会報　京都府京都市支部録事）．京都医事衛生誌．1908; 167: 23–24．②明治四十一年度（自一月　至一二月）歳入出決算（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1909; 178: 26．③明治四十二年度（自一月　至十二月）歳入出決算（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1910; 190: 54．④明治四十三年度（自一月　至十二月）歳入出決算表（会報　京都府医師会京都市支部録事）．京都医事衛生誌．1911; 202: 44–45．⑤明治四十四年度歳入出決算表（会報　京都衛生検査所会計報告）．京都医事衛生誌．1912; 203: 47–48．⑥猪子教授は兵庫県豊岡の出身で，万延元（1860）年生まれ[ⓐ]．明治15（1882）年東京大学医科大学卒後京都府医学校一等教諭として赴任，同20（1887）年校長兼病院長となり，明治32（1899）年京都医科大学教授兼付属病院長となった．大正10（1921）年退官，昭和19（1944）年没[ⓑ]．⑦外科学講習会（会報　京都衛生検査所録事）．京都医事衛生誌．1909; 181: 23．⑧第二　講習会ノ部　一寄付金受領ノ件（会報　京都衛生検査所録事　明治四十二年事務報告）．京都医事衛生誌．1910; 190: 53．⑨衛生検査所明治四十二年度歳入出予算表（会報京都府医師会京都市支部録事）．京都医事衛生誌．1909; 179: 20–21.

【ⓐ衛生新聞社編．猪子止戈之助．関西杏林名家集　第一．大阪：衛生新聞社．1909．ⓑ我邦外科学の泰斗　猪子止戈之助博士逝去．日本医事新報．1944; 1114: 196–197．付記：日本外科学会100年誌（日本外科学会雑誌．第101巻臨時増刊号2000年）54頁掲載の第6回総会の記事には「没年不詳」と書かれている．】

56）猪子京都帝国大学教授（雑報）．京都医事衛生誌．1900; 80: 19.

57）猪子博士（雑報）．京都医事衛生誌．1906; 83: 20–21.

58）ここで言う「昨春来」とは明治33（1900）年春を指すので，明治32（1899）年末の京都医科大学附属医院開院[1)]直後数カ月，あるいは京都衛生検査所医学講習会開始（明治34〔1901〕年6月）[12)]の1年前と言うことになる．

59）自由講座開始の噂（雑報）．医海時報．1901; 353: 188.

60）動静（雑報）．医海時報．1907; 396: 39.

61）京都帝国大学の明治四十三年度歳入歳出予算書[①]および同年度執行予算書[44④)]によると，歳入である講習料を2,500円（1人10円，250人）と見込み，歳出の「京都医科大学ニ於テ講習科ヲ開設シ講師ヲ嘱託スルニ依リ之カ手当」として，教授（4人）1人当たり200円，助教授（2人）同50円が計上されている．さらに助手20～7円，副手10円，看護婦，同見習2～1.5円，事務職，雇員，小使に25円～50銭をそれぞれ支給している．なおこの年度の俸給は，総長6,500円，教授は1,200円と講座給[②]平均525円，助教授は平均400円，助手は平均420円であった．前年，すなわち明治42（1909）年度予算では講習会費予算はまったく計上されていなくてゼロであり，また明治43年11月10日付の小笠原英太郎文部大臣から京大総長への講習科開催の“伺”に対する許可書も保存されている．

①明治四十三年度歳入歳出予算書．京都大学大学文書館＞非現用法人文書＞事務本部＞財務＞執行予算書類．資料番号：01A021125．②教授，助教授は，担当する講座に対する職務俸（前者は年額

400～600円，後者はその半額）を受ける決まりであった（京都大学百年史編集委員会．一 帝国大学高等官官等俸給令〔第1編 法令・規則 第五章 人事 四 教職員 （五）俸給〕京都大学百年史．資料編1．京都大学後援会．1999．p. 305–306.

62）医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1908（11月）; 176: 51.

63）京都医科大学医学講習会の聴講者と時間表（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 178: 29–30.

64）京大の医学講習会と聴講者（雑報）．医海時報．1909; 764: 267.

65）京都医科大学医学講習会名簿（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 179: 27–28.

66）京都医科大学第一回講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 180: 15–17.

67）第1項 岡田総長の就任（第1編 総説 第3章 京都帝国大学の整備 第1節 岡田良平総長のもたらした波紋）．文献48．p. 182–188.

明治40（1907）年10月に文部省総務長官（次官）を経て学習院御用係の職にあった岡田良平が京大総長に就任した．岡田総長は，翌年1月から「毎週1回人格ノ修養ニ資スヘキ課外講演ヲ開始スル事」を決め，「毎週金曜日午後四時より五時迄，法科大学東講堂ニ於テ特別講演（金曜日特別講演）」を開くことになった．この講演会は明治42（1909）年の第3回からは，公立中等学校職員，官立学校生徒，一般市民にも開放されたが，その演者，演題は明らかでない．

68）京都医学会は明治19（1886）年に府医学校職員および市中開業医が相謀って設立され，明治21（1888）年から『京都医学会雑誌』を発行してきた①．しかし明治36（1903）年3月にこれを解散し，改めて京都医科大学の教授らが参加した新京都医学会が設立され，毎月1回，通常第三土曜日に例会を開催して「学術上ノ演説，討議談話等ヲ為ス」ことになった②．明治42（1909）年2月の例会は，医学講習会聴講者の便を考慮して，同月7日（第1日曜日）に繰り上げて開催された．この例会ではまた，一般演題はなく，中西亀太郎（内科学），速水猛（病理学），伊藤隼三（外科学）の諸教授による患者供覧等の講演が行われた③．

①中辻丹治．第一 明治前半時代の京都医事年表—明治十九年，明治二十年，明治二十一年．文献4．p. 773. ②京都医学会発会式兼第一次総会．京都医事衛生誌．1903; 109: 18–19. ③京都医学会例会．京都医事衛生誌．1909; 179: 24.

69）京都医科大学の講習科（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 188: 22.

70）京都医科大学の講習科（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 189: 26.

71）京都医科大学第二回医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1910; 191: 22–23.

この時期の特別講演は，理工科大学化学科近重真澄教授の「禅学管見」であった．

72）京都医学会例会（雑報）．文献70．36.

例会は2月19日（土）に開催され，高山尚平（産科婦人科学「婦人科病に関する診療雑談」），和辻春次（耳鼻咽喉科学〔気管鏡デモンストラチオン〕），伊藤隼三（外科学「デモンストラチオン」），藤浪鑑（病理学「無頭無心臓児のデモンストラチオン」），森島庫太（薬物学「薬物の伍用」）の各教授授による演説があった．定例の第3土曜日に開催されたものの，医学講習会受講生を意識した研修講演ばかりであったと言える．

73）京都医科大学第二回医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1910; 192: 40–42.

74）京都医科大学医学講習会（雑報）．文献37①．25–26.

75）京都大学の医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1911; 212: 19–20.

76）京大の医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1912; 215: 53.

77）京都帝大医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1936; 513: 41–44.

78）松岡道治．先天性股関節脱臼ニ就テ（雑報 京都地方会第21回例会）．児科雑誌．1907; 81: 53.

79）松岡道治．先天性股関節脱臼ニ就テ（学報）．文献24．p. 3.

80）松岡道治．胃癌ノ発育（Wachstum）及び蔓延（Verbreitung）．芸備医学．1907; 129: 25–29.

松岡は癌に関して，すでにBreslau大学留学中に独文論文①を発表して以来，この講演の直後までにいくつもの論文②,③,④を公刊している．

一方明治40（1907）年8月にはわが国で癌研究会⑤が発足し，機関誌『癌』が創刊された．その意味から，この演題は時宜を得たものであった．

① Matsuoka（Breslau）．Pathologische Anatomie des Carcinoma papillosum ventriculi. Beiträge zur klinischen Chirurgie. 1905; 46（3）: 723–733. ②松岡道治．胃癌療法ニ対シ臨床医家ノ注意ヲ促ス（Zur Beachtung des Kliniker für d. Behabdlung des Magencarcinoma. 癌．1907; 1（1）: 238–253. ③松岡道治．胃癌ノ病理解剖ニ就テ．日本外科学会雑誌．1907; 8（1）: 59–60. ④松岡道治．癌腫に就て．医海時報．1908; 707: 16–17, 708: 106–108. ⑤癌研究会七十五年史編纂委員会編．1．概要および2．創業時代の癌研究会（第1章 草創期．1．概要）．癌研究七十五年史．癌研究会；1989．p. 11–12, 12–19.

81）松岡道治．千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ．京都医学雑誌．1907; 4（4，総会号附録）: 10–12.

82）松岡道治．先天性股関節脱臼手術及繃帯法供覧．児科雑誌．1909; 106: 153–160.

83）京大教授の講演（雑報）．京都医事衛生誌．1910; 194: 47.

84）松岡道治．小児外科ニ就テ（口演大意）（診療雑談）．

児科雑誌．1910; 118: 24–29.

この文章の冒頭に「小児学会」「親友柳瀬君[①]の御依頼による」と言う文言があることから，日本小児学会の地方会あるいは柳瀬實次郎（さねじろう）が勤務していた大阪回生病院の例会で発表された口演と推定される．しかし『児科雑誌』の地方会記事[②]や大阪回生病院の機関誌『臨牀集報』の例会記事[③]には，この演題についての記載は見られない．

①柳瀬實次郎（明治8〔1875〕―大正12〔1923〕年）[ⓐ]は愛媛県出身で明治34（1901）年東京帝国大学卒，東大医科大学院（小児科学）を経て大阪回生病院へ招聘せられ，明治39（1906）年欧州へ留学，翌年帰朝後同院小児科長となった[ⓐ]．なお当時，日本小児科学会の編集委員，大阪府地方委員を務めていた[ⓑ]．②児科雑誌104巻（明治42〔1909〕年1月）から119巻（明治43〔1910〕年41月）に日本小児科学会大阪地方会総会記事[ⓒ]を含めてこの演題はない．③第20回例会（臨牀集報．1909; 2: 259–260）から30回例会（臨牀集報．1910; 4: 535–537）まで．

【ⓐ井關九郎．多田学太郎，柳瀬實次郎．批判研究博士人物．東京：發展社出版部．1925．p. 482–483．ⓑ日本小児科学会．児科雑誌．1910; 116: 後附の1．ⓒ日本小児科学会大阪地方会総会．児科雑誌．1909; 110: 480.】

85）総会記事．第十七回九州沖縄医学会編纂委員代表中村平輪編纂発行．第十七回九州沖縄医学会誌．1912．p. 12, 15.

86）ユニヴアーシチー，エキステンション（university extension 大学拡張）とは，正規の学生以外の主として成人を対象に学外で行う大学教育システム[①]で，今日の大学開放講座に当たる．この運動は英国のケンブリッジ大学（1864〔元治元〕年）[①]あるいはオックスフォード大学[②]（1885〔明治16〕年）から始まり，次いで米国へ波及してシカゴ大学（1885〔明治18〕年）[①]あるいはジョンス・ホプキンス大学（1887〔明治20〕年）[③]から広まったとされている．

① university extension. The New Encyclopaedia Britannica. Micropaede. 15th ed. Chicago; Encylopaedia Britanica Inc. 1987; 12: 186．②藤原喜代蔵．四〇　大学拡張講演事務務所（付録　教育学術諸団体）．大英国の教育．東京：文教会；1921．p. 895–900．③納富忠一著兼発行．第十二編　大学教育．米国教育制度．1907．p. 132–134.

87）京都大学百年史編集委員会編．二一　京都大学講演会　専門智識普及の目的　八月八日より三週間〔抄〕（第二編　百年の出来事．第二章　創立と諸制度の整備　二，諸制度の整備）．京都大学百周年史　資料編2．京都大学教育研究振興財団．2000．p. 183–186.

88）大学拡張の開始．京都日出新聞．明治43（1910）年8月8日；8324：1面.

89）京都帝国大学第一回講演会（雑報）．京都医事衛生誌．1910; 195: 19–20.

90）京都大学講演会．京都日出新聞．明治43（1910）年5月28日；8252：1面.

91）京大講演会彙報．文献88．2面.

92）京都大学講演会（雑報）．京都医事衛生誌．1912; 221: 28.

93）2．初代総長の理念と自負（第1編　総説　第2章　京都帝国大学の創設第1節　創立の過程と理念　第3項　設立の理念と期待）．文献48．p. 120–121.

Dr. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto University, and His Achievements
(Part 4: Prof. M. Matsuoka's Lecture to Medical and Civic Communities)

Hayato HIROTANI

Kyoto city

Dr. M. Matsuoka gave many lectures to physicians at the Postdoctoral Course Lectures sponsored by the Kyoto Eisei Kensasho (Kyoto Bacterial and Biochemical Laboratory) run by the Kyoto Medical Association, and the Postdoctoral Course Lectures of the Kyoto Medical School, Kyoto Imperial University. He was also invited to give lectures at several regional medical associations. He also was a speaker at the Kyoto Imperial University Extension course and he lectured at the Enryakuji Temple on Mt. Hiei, sponsored by a newspaper company. It is remarkable that these activities were carried out in addition to his other notable academic work previously reported.

Key words: Michiharu Matsuoka, the Kyoto Eisei Kensasho, Postdoctral Course Lectures, university extension